
STUDY ONE

～中学生の学習支援～

第1章 プロジェクトの概要など

1. プロジェクトの名称、目的など

2. 代表者および構成員

・代表者

六車楓瑚 発達障害教育専攻 2回生

・構成員

廣田葉月 教育学専攻 4回生

鍋島圭 教育学専攻 4回生

松田健 教育学専攻 4回生

天野小春 国語領域専攻 4回生

岡田蔭しいな 国語領域専攻 4回生

阪本萌菜美 国語領域専攻 4回生

酒井彩花 社会領域専攻 4回生

藪下瞬 数学領域専攻 4回生

松本和樹 技術領域専攻 4回生

根岸 亮太 教育学専攻 3回生

岩井愛子 社会領域専攻 3回生

矢野詩織 社会領域専攻 3回生

山本伊歩希 社会領域専攻 3回生

堀尾泰伽 英語領域専攻 3回生

村松良磨 英語領域専攻 3回生

石垣元陽 数学領域専攻 3回生

森實康太郎 理科領域専攻 3回生

3. 助言教員

神代健彦先生（教育学科）

第2章 内容や実施経過など

1. 放課後学習支援教室 STUDY ONE

（1）活動概要

時間：毎週金曜日 18：00～20：00

場所：伏見いきいき市民活動センター

対象：中学生

（2）活動目的・内容

放課後学習支援教室は、中学生の学習支援、居場所支援を目的としている。支援を必要とする中学生に支援が行き届くように藤森中学校との連携を行うとともに、中学生の実態に合わせた多面的・多角的な支援を行うための情報共有を行ってきた。

現在の登録者は中学3年生2名、中学2年生2名、中学1年生1名の計5名である。中学生への連絡は公式LINEを通して行っており、毎週活動日の前には活動の告知を行った。また、中学生が大学生に質問したり、活動になかなか来ることができていない中学生に連絡したりするなど、中学生との繋がりを保つためにも活用した。

今年度は6月から活動を開始した。毎回の活動には約4名の中学生が参加しており、学校の宿題に取り組んだり、本団体が所有するワークを用いて復習や予習を行ったりして過ごしている。中学生がわからない部分は大学生がルーズリーフを活用して、演習を行ったり、会話や休憩時間の中に学習要素を取り入れたりするなど、学習支援を行った。

学習支援のみならず、居場所支援も行ってきた。STUDY ONEで、家族や友人、教員とは違うつながり、大学生という中学生と年齢が近い存在との関わり、学校でも家庭でもない居場所があるということが中学生の安心感につながるように、トランプやUNOなどのカードゲームをするなどの活動も行った。このような活動を行うことで、中学生自身のコミュニケーション能力や自己表現をする力が身に付いたように思える。また、ハロウィンとクリスマスにはイベントを行うなど、相対的貧困に伴う経験格差の是正や中学生がまた来たい、安心できる居場所作りのための取り組みを行った。

活動前後には活動計画や中学生の様子の情報共有などを行い、構成員全員で中学生を見守り、関わることをできるようにした。

2. 研究活動

(1) 他団体への視察

今年度は令和7年12月4日に龍谷大学の学生と京都市ユースサービス協会の連携事業である「京の拠り所」に行った。家庭で学習環境が整いにくい中高生を対象に居場所支援、学習支援を行っている。事前ミーティングから活動後の振り返りまで見学させていただいた。龍谷大学の学生や京都市ユースサービス協会の方と話すことで、活動の悩みやお互いの良さを交流することができた。

STUDY ONE と同じような活動をしていたが、STUDY ONE よりも居場所支援に力を入れていた。事前ミーティングや活動後の振り返りなどをしっかりと行い、学生同士の連携も取れているように感じた。参加者を増やすために、商店街のイベントでチラシを配るなどの活動を行っているという話を聞いた。また、大学生を増やすために、年度の始めに構成員が新入生の前で宣伝する機会を設けていると伺った。また、活動の一環として季節のイベントを行っている。(流しそうめん、ハロウィン、クリスマス) 経験格差をなくすための取り組みであると伺った。イベントはすべて大学生が企画している。さらに、定期的に大学生内で勉強会を行っているという話も伺った。

(2) 勉強会

子どもの貧困についての深い理解や、学習支援の質の向上を目的として勉強会を行った。今年度は学生の人数が少なかったことから、昨年度に比べてあまり行えていない。

以下、実施日時・内容

第1回(6月19日)本年度の活動方針の確認
第2回(10月24日)他団体への視察につい

て

第3回(12月5日)子どもの貧困に関するビデオ視聴・交流

第4回(12月12日)視察報告—京の拠り所

第3章 結果や成果など

1. 放課後学習支援教室 STUDY ONE

今年度は活動に参加する大学生、中学生が少なかったため、小さい部屋で活動を行った。

また、昨年度に引き続き担当制を用いたが、中学生のニーズに合わせて担当とは違う大学生がサポートに入ったり、1人の中学生に対して複数人で関わったりすることで、昨年度よりも中学生が大学生と積極的に関わろうとしたり、口数の少なかった中学生が話してくれるようになったりした。継続して来てくれる中学生も多く、中学生にとって来たい場所、楽しく過ごせる場所になっているのではないかと感じた。

今年度は中学1年生から3年生まで参加してくれた。中学3年生は受験に向けて過去問を解くこともあったため、より専門的な知識のある大学生を担当にするなど、学習面でのサポートを工夫した。中学1、2年生に対しては昨年度に引き続き、学習時間を増やしたり、さまざまな教科を学習したりするように促した。

中学生が帰宅した後は、中学生の様子についての共有や大学生自身が感じたことや中学生との接し方について振り返りを行った。活動中の疑問点や困った点についても共有し、STUDY ONE 全体の課題として捉え、大学生同士で意見交流を行うこともできた。中学生の様子についての振り返りをノートに書くことを今年度も行った。昨年度のノートの書き方の統一により、今年度もスムーズにノートを作成し、情報共有することができた。

2. 研究活動

(1) 他団体への視察

見学させていただく中で、構成員同士の連携が上手くとれていると感じた。困ったことがあればすぐに上回生に相談できる雰囲気づくりができているように感じた。その理由として、コーディネーターと呼ばれるリーダー的な存在の学生が構成員の面談を行っていることが考えられる。参加者の中高生だけでなく、大学生も活動しやすいようにコーディネーターが動いていることが分かった。

構成員の人数が多く、活動に対する熱量の差を不安視していた。それは STUDY ONE も同じであるため、似たような活動をしている者同士、共通する悩みを交流することができた。見学したことで、STUDY ONE へ活かせることも多くあった。事前ミーティングや勉強会の充実は来年度から行いたいと思った。

(2) 勉強会

今年度はあまり行えなかったが、少ない回数の中で、1人1人が問題意識をもって取り組むことができた。特に、子どもの貧困に関するビデオ視聴・交流では、それぞれの考えや今後の活動方針などについて改めて確認することができた。このような機会は来年度も設けていきたい。来年度は今年度より回数を増やし、特に高校受験の入試制度について大学生が学ぶ機会を作れるようにしたいと考えている。

第4章 まとめと反省、今後の展望など

今年度も中学生、大学生が共に少なかったため、勉強会での話し合いの回数が少ないなど、さまざまな意見を得ることがあまりできなかった。そのため、まずは新規構成員や新規参加者の獲得を目指したいと考えている。大学生の確保については、4月の早い段階から積極的に勧誘を行い、中学生の参加者は藤森中学校と連携し増やせるようにしたい。次に、勉強会を定期的に行い、意見交流の機会を増やしたいと思う。昨年度に引き続き、勉強会は恒例化できていないため、恒例化に向

けた工夫も考える必要がある。

今年度は受験を行った中学3年生がいたが、早い段階での入試だったため、構成員で入試情報に関する共有があまりできていなかった。来年度は受験を控えた中学生が2人いるため、秋ごろには京都市（京都府）の高校入試について学ぶ機会を設けようと考えている。中学1,2年生については1人で学習に取り組んだり、学習時間をだんだん長くしたりして学習習慣を作れるように促した。中学生自身もだんだんと集中して取り組めるようになっていた。

今年度の反省を活かし、来年度は構成員、参加者共に増やし、両者にとって有意義な活動となるよう、頑張っていきたい。